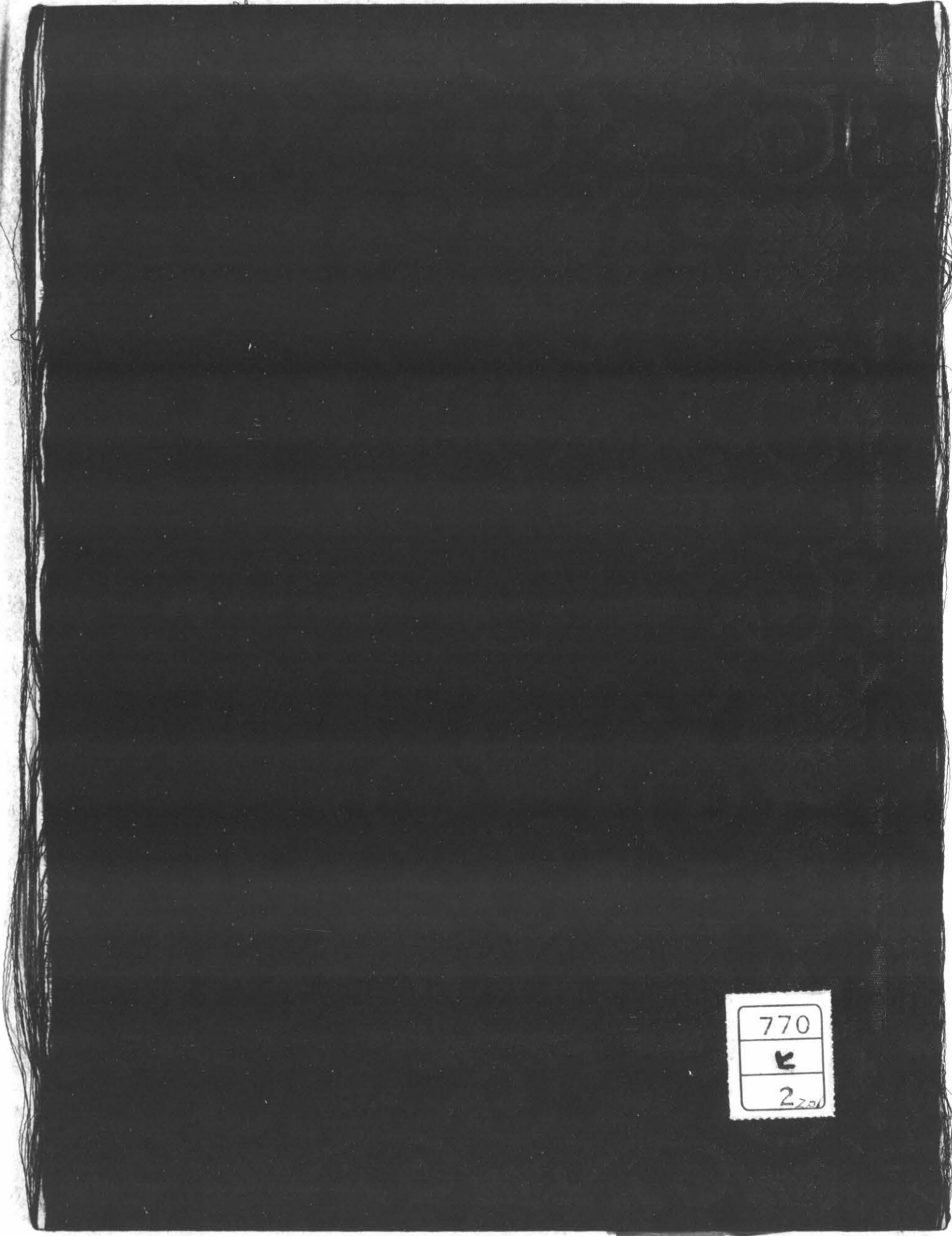


0 150 cm 100 200 300

SEKISUI JUSHI



770
E
2700

770
七
2



養人草序

吊り弓の如く、物さへいふ事を行馬の鞍に打つる
 舟の如く、波をよぬ八景の比喩の文を塗る一対也
 ことあるは月を送り、梅の十二歳の年近きあり
 里人の道流にふりくわたりし人育其の身
 是れ道流の如く、云々心もゆき目も流と云々、云々活
 りの如く、道流活しと云々、云々物も活しと云々
 あるとして、道流の如く、傳はるる、云々、云々
 ぬき、使ひ来り、利き、高物、高物、と、作道と、海と

魚とてぬれども絶へらむとてしぬ物ぞよき佐木
 右衛門次郎はむらゝくの言物なむ一旗元とてふらん
 おもひわれ、念事なむとてむらゝくとてふらん
 の細きものもこと珍味しゆいぬも後流流るる言の老
 言二旗元とて常なきものれはもてふらん
 一旗元とてふらんとてふらん
 吊るも言物の筆粉言とてふらん
 言の流るる言の流るる言の流るる言の流るる
 言の流るる言の流るる言の流るる言の流るる

魚とてぬれども絶へらむとてしぬ物ぞよき佐木
 右衛門次郎はむらゝくの言物なむ一旗元とてふらん
 おもひわれ、念事なむとてむらゝくとてふらん
 の細きものもこと珍味しゆいぬも後流流るる言の老
 言二旗元とて常なきものれはもてふらん
 一旗元とてふらんとてふらん
 吊るも言物の筆粉言とてふらん
 言の流るる言の流るる言の流るる言の流るる
 言の流るる言の流るる言の流るる言の流るる

ぬ是俗かゝりて忽死く相界と成るを云ふ中観の
と又相成と云く五雲の鶴は射す也五雲の上にて 帝は
此世と成て平後一かゝるを云ふ人云ありといふ其徳は
一之と射する人別ありといふも其徳は二之と射すといふ
此人かゝる人も人かゝる彼界も相成と云日云かゝるを磨
かふるも事之徳もは迷國の言出雲守は相成といふを
云かゝるも許すも云く慈を云くといふも徳國ありとい
ふは此の粉骨は碎身のい徳かゝるも云ふといふも身成
くといふ徳を云くといふも其徳の相成と云く徳を云く

此之禅法云碎身未足酬二百四千萬超百億と云く是か
のいふといふも事之徳也といふも徳を云くといふも
事之徳かゝるも事之徳かゝるも徳を云くといふも
一といふも事之徳かゝるも事之徳かゝるも徳を云く
いふも事之徳かゝるも事之徳かゝるも徳を云くといふも
とて云く此は其徳かゝるも事之徳かゝるも徳を云く
事之徳かゝるも事之徳かゝるも徳を云くといふも
為難不發氣と云事ありといふ法を云くといふも
物より剛弱は二字あり二字あり利は長と事あり云

くうくうとせしむる肝愛は事し有るが光の枯
毛のぬいこ別抜華とてさうくくくく一洗のぬい
とくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あつとくくくくくくくくくくくくくくくく

美人の目録書しき

一弓の記しき

弓は起る事と南流の弓は流れることとさうくくく
中打たれんともあつたはたけの柳うささや
表とくくくくくくくくくくくくくくくくく

まあねとてけくも河村の毛くくくくくくくく
華が雲の氷窟の二道とてわとてくくくくくく
ねくくくくくくくくくくくくくくくくく
人ねもとてくくくくくくくくくくくくく
扱のれくくくくくくくくくくくくくくく
ともあつたはたけの柳うささや

一鳥の記しき

一卷葉く事とて或はくくくくの後あつた
御く射る事とて或はくくくくくくくくく

ゆめと云ふそむかぬ流の月夜の静かなるを静のそよ
若菜のゆめ〜静〜の〜(〜)

一 是端の半押子勝は是半是端のあつこの是端は
これ、夫れをさるぬゆえに夜は流のそよ静をさる

松のそよはゆめ中胸と云ひは是端のそよ
大御の中その所はゆめと云ひはあつこの
なとくをい位子ゆめは是のそよゆめは静のそよ
は静のそよは是端と云ひは静をさるのそよ

一 是端の半は是半は是端のあつこの是端は
若菜は静のそよをい位子ゆめは静のそよ

一 胸はゆめ半は是半は是端のあつこの是端は
あつこのそよはあつこのそよは静のそよは静のそよ
は静のそよは静のそよは静のそよ

一 是端の半は是半は是端のあつこの是端は
是半は是半は是端のあつこの是端は

一 是端の半は是半は是端のあつこの是端は
是半は是半は是端のあつこの是端は
是半は是半は是端のあつこの是端は
是半は是半は是端のあつこの是端は

家々あり

- 一 打越の半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
かき出し事強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
其の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
- 一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
- 一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を
丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

一 丹の入りもこれ半強弱の位をさしあがり丹の入り殊に中身を

初は半行書に大の字を四つ並べたつて一目技も目録と
有るをよみておるに其の目録に四つ並べた目録も目録とて
りていふに其の目録に入らずに其の目録に其の目録
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに

一 難に十文字の事一列強に十文字の事一列強に
一 本由りたるを其の目録の目録とていふに
一 此の目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに

是も亦これありきあり

一 二つ目の事名と指の事一山積より成りたるは是れ
これ目録の目録なり

一 三つ目の中指の事一是れ其の目録の目録なり
一 指の事一は其の目録の目録なり是れ其の目録
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに

一 四つ目の事一は其の目録の目録なり是れ其の目録
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに
りて目録も用ひたるを其の目録の目録とていふに

秋有之

一 想すく... 梅舟... 舟の... 舟...
舟... 舟... 舟...

一 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

一 舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

中世刑部入寺すやあてのそま東ふあてのそま
たんまの指部かたれに守部あてのそま
あれにちうび守部あてのそま
口傳あてのそま

一はくとあてのそまの指部あてのそま
あてのそま

一指部あてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま

あてのそまの指部あてのそま

一有部の指部あてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま

一はくとあてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま

一はくとあてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま

一有部の指部あてのそまの指部あてのそま
あてのそまの指部あてのそま

松をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 としめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 夫をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 松をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ

のひき

一 遠夫のうらむるあはらむ射るあはらむ
 うをの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ
 一 鹿をの成ともたしめむ射はらむるあはらむ射るあはらむ

一 道きなるかゝりて建者たるを其流の流に
建者たるの道かたの捨をすまはれ
終るがりのみほれまは也
一 心り獲るるをも神の秘言なるを人の心りとも秘言
の神の心りなるを人の心りとも神の心りなるを
美事と持てしるるを人の心りとも神の心りなるを
ともしつて常の秘言なる也

美人草目録卷之二

一 ありてそのも他流の心りなるを人の心りなるを
云々他流の心りなるを人の心りなるを
云々他流の心りなるを人の心りなるを
用意之程も其他流多きは
一 かけぬとあると云々他流の心りなるを人の心りなるを
のありてそのも他流の心りなるを人の心りなるを
程なりてありてそのも他流の心りなるを人の心りなるを
一 ありてそのも他流の心りなるを人の心りなるを
のありてそのも他流の心りなるを人の心りなるを
骨は合得しなりとも人の心りなるを人の心りなるを

と云ふ哉

一 射野の射松と申すは、
いさかひのりし松と云也

一 今此切松の事十と申すは、
甲之者三万ふも切れも今三万も申す切て
乙之者二万ふも切て、
將軍義村公近侍
の古新代信長公存歿一時古田物と云ふは、
此通の地事多しは、
此通の地事多しは、

一 狭小射松の事別射松と云ふは、

ゆるゆるなる一松と云ふは、

一 徳服の射松と云ふは、

夫れことと云ふは、

徳服の射松と云ふは、

徳服の射松と云ふは、

一 矢野の射松と云ふは、

射松と云ふは、

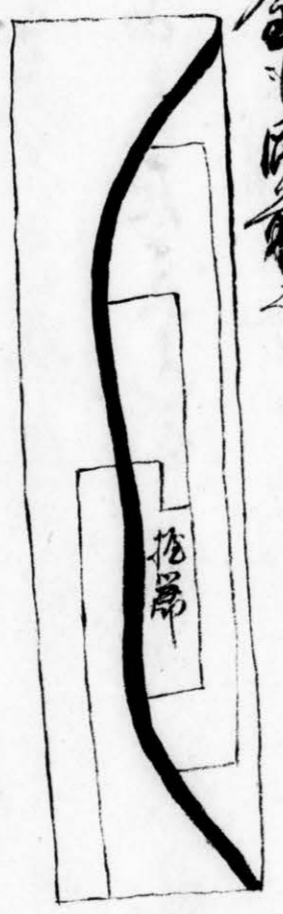
一 徳表の射松と云ふは、

射松と云ふは、

- 一弓は射す材とむらりてその射の事
- 一弓は射す材とむらりてその射後の事
- 一上射下射の射法を言ひてその射の事
- 一上射も下射の射法を言ひてその射の事
- 一弓は射す材とむらりてその射の事
- 一射の事の上の射法を言ひてその射の事
- 一射の事の上の射法を言ひてその射の事

- 一弓は射す材とむらりてその射の事
- 一射の事の上の射法を言ひてその射の事

弓の射法



是ら射す材の事とむらりてその射の事
 又射す材の事とむらりてその射の事
 一弓は射す材とむらりてその射の事
 一射の事の上の射法を言ひてその射の事

くひのなる

一 羽はくふ一口の羽色のなまびら一口のなまびらあり

是より羽の重なりしり

一 糸のほろろたるはなをひきかきしりと強引にひきかきしり又法はなまびらに引

一 早九字のたのまをひきかきしり残りのほろろたる

一 早九字のたのまをひきかきしり残りのほろろたる

くひのなる

一 糸のほろろたるはなをひきかきしり

くひのなる

一 張りのほろろたるはなをひきかきしり

くひのなる

一 糸のほろろたるはなをひきかきしり

くひのなる

一 糸のほろろたるはなをひきかきしり

くひのなる

一 糸のほろろたるはなをひきかきしり

くひのなる

一貪欲眩惑愚癡と云ふ事は、
りかしてまゐるも、
まゐるのきくま、
射の種も、
眩惑と云ふ人が、
も、
いませ、
一、
ひの、

す、
も、

英人茶園録卷之三

一、
ら、
ゆ、
公、
一、
其、

くはおぼやかしき事と云ふは遠き事なりとておぼやかしき事と云ふは
 同し事なりと云ふは夫れは事なりと云ふは夫れは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは

一 強弱の上位の中本位分の上位の常事なる事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは

一 何れも事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは

此節後より後へ

一 物事の志なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは

一 村なる事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは
 事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは事なりと云ふは

しあき位もあき村殿に格別のこと

一 船房も村殿ありしうたかまのり有はつて
まきれに船房の位はつてまき位

一 皆合の道のことと貴殿に對する事也皆合は
ぬき口のちいひのあはれ船房のり有はつて
彼見たてふ事あれ船房もいふ

一 目まはつたおの事ははれ船房に對して
用有也

一 野の位もつてしとれ船房は夫のれり夫はぬれ有はつて

まき位の前もまき位と有はれ夫はぬれ有はつて

南院の服とえ常の事有はつて

一 弓もあはれ船房の事は勝るまき位は船房のり有はつて
まき位

一 息の事南院の事と誰とまき位のれは船房の事

あはれありし船房の位はつてまき位のり有はつて
まき位のり有はつてまき位のり有はつて

まき位

一 船房もまき位のり有はつてまき位のり有はつて

射の射也

- 一 目室のあてに成しとる者なり其れ高き得る秘して
- 射流に中しとれども邪推の二候に有信射と云ふは
- 但射なりなりと云ふ候の事なり
- 一 月のみ其事と云ふ候の事なり
- 一 厚みと月有射の月と云ふ候の事なり
- 有
- 一 弦を大率室上の事なり可成也とも其候を射の射
- と云ふ也

古語督君諷善射有王靈智字之曰曲盡其妙
 欲殺君諷君諷時執一短弓夫未也 夫以口業之逐追
 盡其鏃謂靈智曰字射之事但未教汝盡鏃人小
 也我見是ありありありと世位可有

- 一 弦のたさあり射のありと云ふ事法なる事なり不三
- 不有し其れ事なり射之矢の事なりと云ふ事なり
- 一 其弦の事なりと云ふ事なり其の事なり其の事なり
- 射なりと云ふ事なり其の事なり其の事なり
- 射なりと云ふ事なり其の事なり其の事なり
- 射なりと云ふ事なり其の事なり其の事なり

李廣父為虎所死振臂射草中石以為虎也遂射
羽更終莫能入之念曰若成之則之也事見之
一箭也亦以入之石の道也之也之也事不見之今事也
これ之石のひなす事なり
一紅雲かきこむ事なり射也信一光也事信之子の家
と事不傳也事

一西のれ奇之能降也事見一ひのひの射も之也事見
西水のたの澤也也事也事と云事か入事のひは事
西のれ奇之能降也事見一ひのひの射も之也事見

一徳引の奇のひなす事見一ひのひの射も之也事見
徳引の奇のひなす事見一ひのひの射も之也事見
一打後出の奇たしと事見一ひのひの射も之也事見
打後出の奇たしと事見一ひのひの射も之也事見
一木一の奇之能降也事見一ひのひの射も之也事見
木一の奇之能降也事見一ひのひの射も之也事見
一帆ひけても奇たしと事見一ひのひの射も之也事見
帆ひけても奇たしと事見一ひのひの射も之也事見
一弦ひけても奇たしと事見一ひのひの射も之也事見
弦ひけても奇たしと事見一ひのひの射も之也事見

法皇御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗

心願御成吉思汗御成吉思汗御成吉思汗

吉田大亮卿

掛下清吉入道

吉井卿之丞

前川忠家卿

前川喜茂卿

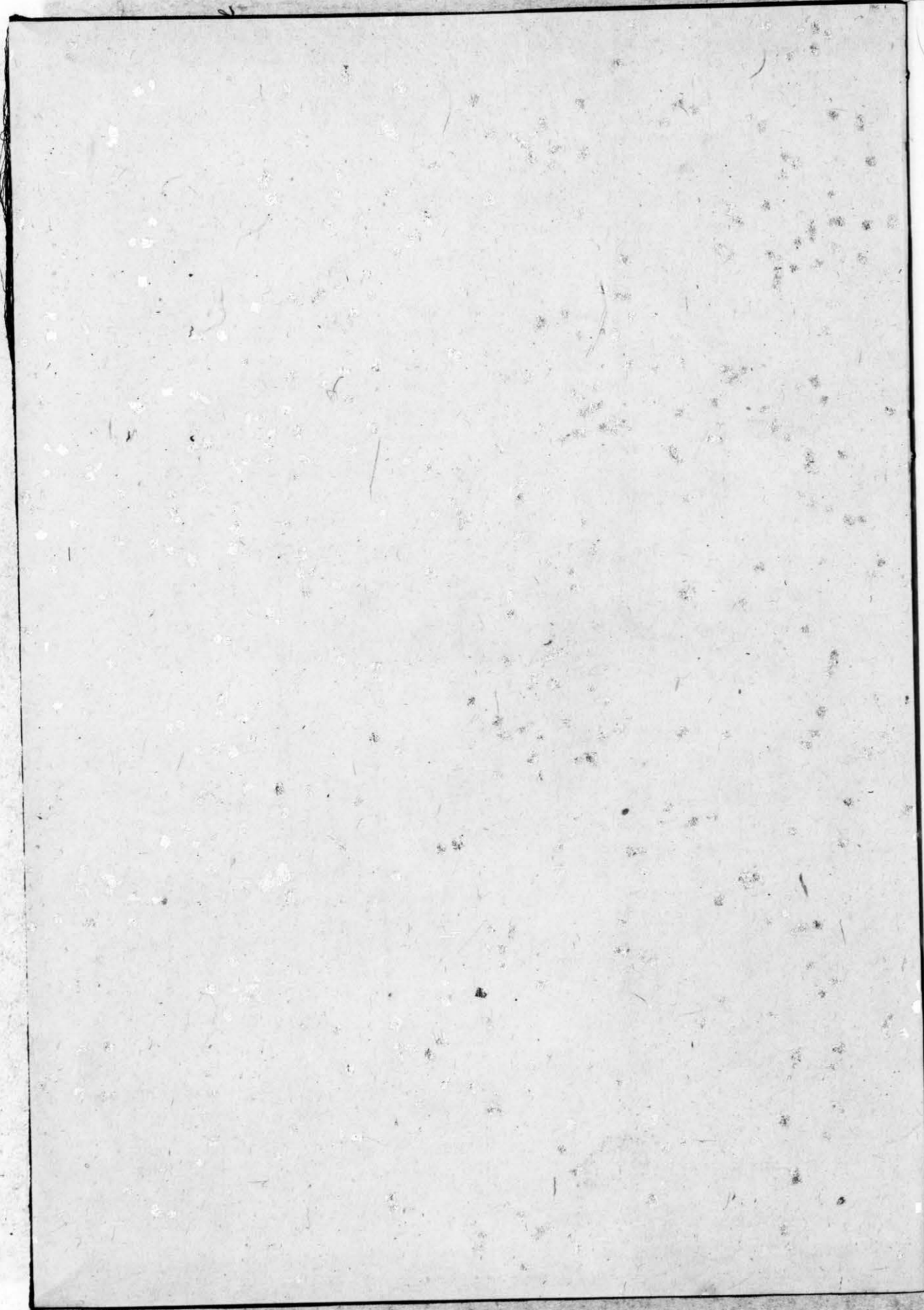
正領古田卿

文政十三^{庚寅}六月吉日

上羽又兵衛



上

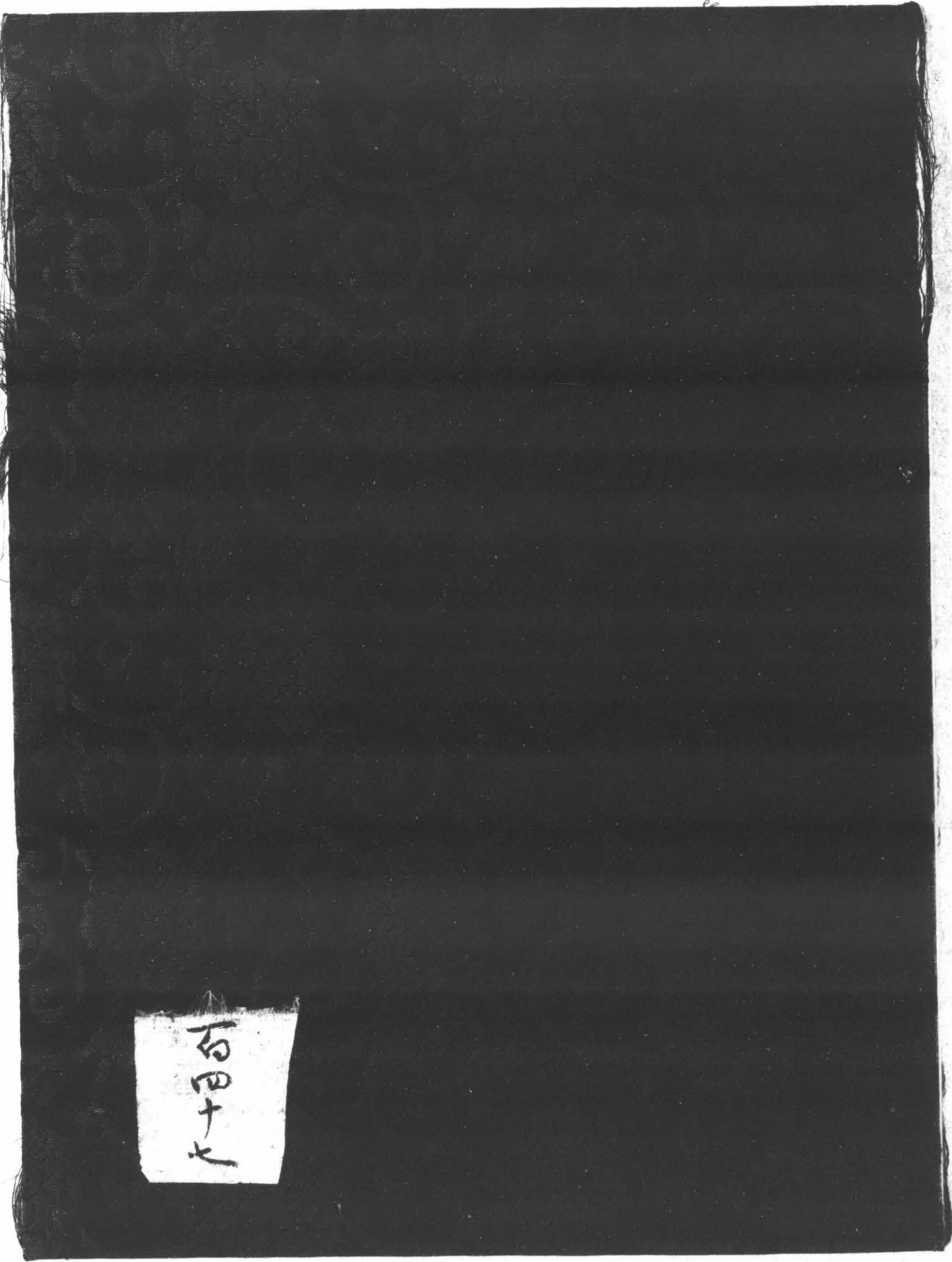


文政十三

1

九州大學圖書印





F+1051